

大城晃さん

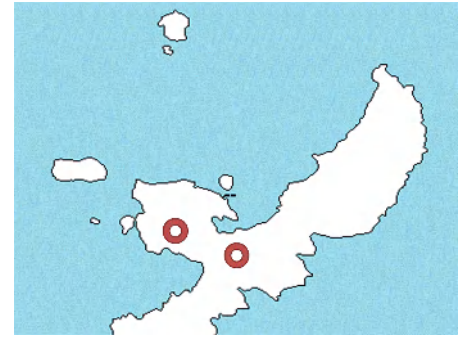
1929(昭和4)年生まれ

当時の本籍地 沖縄県

陸軍

所属 独立混成第44旅団第2歩兵隊

戦地 八重岳・多野岳(名護市)



●1942(昭和17)年4月 沖縄県立第三中学校に入学

父は戦争が始まる時に安和(あわ)小学校校長だった。それ以前は転々と4箇所くらい移動していた。安和は名護の近くで電気も通って開けていたが、田舎はランプしかない自給自足の原始的な暮らし。今考えると懐かしい。魚も漁れるしサトウキビで砂糖も作る。味噌も塩も自分で作る。山には果物はいっぱいある。着るものも芭蕉布で自分で作る。藍染で。そんなに不自由はしなかった。

三中は名護にあったから本部半島一体全部から生徒が集まった。寄宿舎はなく下宿でお金がかかった。

●1944(昭和19)年4月 沖縄県立第三中学校の3年生に進級する

●1944(昭和19)年7月 独立混成第44旅団第2歩兵隊が校舎を接收

校舎が接收され兵舎になった。軍隊はある日、南部那覇港から隊列を組んで歩いて名護の学校に入った。

●1944(昭和19)年7月～1945(昭和20)年4月 中学校の校舎で無線の訓練を受ける

兵隊は教室にいて、我々は柔道場と講堂で無線の訓練を受けた。いつの間にかそうになっていた。だんだん空襲が激しくなり、1944(昭和20)年初めに伊豆味(いずみ)の学校に行った。戦闘が始まるまで3ヶ月間猛特訓。

●1945(昭和20)年4月1日 米軍沖縄本島に上陸

8日に名護に米軍がきて真っ先に戦車隊が安和小学校の校舎に侵入して来た。それを山の上から見て、早速攻撃することになった。八重岳の麓から山を越えて砲弾が落ちる曲射砲で攻撃するというので準備した。その場合、通信兵が安和小学校の見える嘉津宇(かつう)岳の頂上に登って、そこから大砲を撃った時にどこに着弾したかを見て、「もう少し前とか後ろ」とか嘉津宇岳と大砲の間を通信で指示する。自分の家が見えるので嘉津宇岳に登りたかったが、ジャンケンで負けたので同じ無線兵の相棒に登り、私は曲射砲のそばで待機した。

●1945(昭和20)年4月中旬(16～17日) 八重岳から多野岳へ撤退命令

真部山(八重岳北側)で戦闘をやったのですが、引き上げる時に無線班はばらばらで、我々は遠回りをして八重岳に戻ってきた。我々が着いた時にはもう整列して今まさに多野岳に出発しようとしている時だった。

●護郷隊の切り込み

我々が多野岳に到着したその朝、護郷隊の村上隊長が50名の隊員を並べて訓示していた。どんな話をするのかと聞いていたが「これから名護に斬り込みに行く」という。我々が命からがら突破してやっとたどり着いてホッとしている時に、凄い連中がいるなと思って本当にびっくりした。この兵隊が少年兵で、彼らの顔見たら悲愴な感じで。

護郷隊は勇敢。精神を徹底的に鍛え上げられて、正規の兵隊以上に優秀だと言われていた少年たち。大砲一門もなく、擲弾筒と小銃だけ。装備は貧弱だったが士気は高かった。

●1945(昭和20)年4月25日夕方 多野岳から撤退。26日の午前8時頃、東村の有銘(あるめ)に到着

多野岳で解散ということになっていたようだが、その話は聞いてない。無線班から離れて孤立していた。4月26日に有銘の部落についた時は平和そのもの。銃声も聞こえないし、良い所に来たなどのんびりしていた。すると、アメリカの斥候が3名、有銘に入ってきた。アメリカ兵は予想以上の日本兵がいるので驚いて山に逃げ込もうとしたが、機関銃小隊が攻撃。アメリカ兵2人が死んで、最後の1人が海の方へ逃げた。南部からの避難民2人を人質に取ったが、その後アメリカ兵も殺された。近くに住むおじいさんが、3人のアメリカ兵の遺体を放置するのは忍びない、かわいそうだと言って埋葬したのを戦後知った。その優しい心は立派だと、私も沖縄人として誇りに思う。

残念ながら避難民2人も亡くなった。アメリカ兵は海岸で射殺されたが、避難民2人の遺体を山の上から日本兵が転がしているところを帰りが見た。アメリカ兵は2人の避難民を釈放した。普通なら喜んで自分の家族のところに戻るはずだが誰にやられたのか。日本軍ではないと思う。日本軍の目的は逃げたアメリカ兵を追うことで避難民は関係ない。僕が思うにやましい事があつたのではないかと思う。

言いたいのは、日本兵の中には本当に悪い人もいるし良い人もたくさんいる。そうかと言って沖縄の人はみんな良い人かというそうでもない。

(取材日:2012年2月4日)